WANG LING JING
王　玲　静

学位の種類	博　士（国際文化）
学位記番号	国博　第　86　号
学位授与年月日	平成20年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期３年の課程） 国際文化交流論専攻
学位論文題目	第二言語習得における言語不安の研究
論文審査委員	（主査） 教　授　宮　本　正　夫　　教　授　小　野　尚　之 准教授　中　本　武　志 准教授　ナロック　ハイコ 准教授　ワーナー・ピーター・ジョン

論文内容の要旨

１．研究の目的

第二言語習得に影響を及ぼす情意要因の１つとして第二言語不安（second language anxiety）がある。いかにして学習者の不安感を軽減し、動機づけ（motivation）と自己効力感（self-efficacy）、自尊感情（self-esteem）などを促進し、習得結果を高めるかといった課題が、第二言語教育に携わる者にとって対面しなければならない急務である。

しかし、多くの実証的研究から第二言語習得に対する不安の妨害的作用が見いだされるものの、不安が学習を促進する場合もあるという見解もあり、第二言語教育において不安をどのように捉えてゆけばよいのかということについては、曖昧なままである。そのため、第二言語不安の本質について実証的に検討する必要がある。

以上の問題意識をふまえ、本研究では第二言語不安の本質を実証的に問い直し、第二言語不安の実態を明らかにすることを目的とする。

2．研究の課題

先行研究より2つの課題があることがわかった。第1の課題は、「第二言語不安」研究の対象言語が、英語、フランス語、スペイン語といった欧米語に限られており、それ以外の言語による「第二言語不安」の調査はまだ少ないということである。たとえば日本語学習者を対象に行う実証研究は少なく、さらに目標言語を英語と日本語に絞った研究は見当たらない。第2の課題は、第二言語不安の本質が十分に説明されていない点である。第二言語不安は、他の情意要因を通して間接的に習得過程と習得結果に負の影響を与える可能性がある。さらに、一般的不安として知られている対人不安は、「状況特性不安（situational-specific anxiety）」としての第二言語不安とどのように関連づけられているかに関しても明らかにされていない。

以上の問題意識から、本研究では第二言語不安をより明確に捉えるため、中国人日本語学習者、中国人英語学習者、日本人英語学習者の3つのグループを対象にアンケート調査を実施し、以下の7点について実証的に検討する。

（1）第二言語不安自体について分析する（第3章の実証研究）。

（2）第二言語不安と習得結果との関係について分析する（第4章の実証研究）。

（3）第二言語不安と動機づけとの関係について分析する（第5章の実証研究）。

（4）第二言語不安と自己効力感との関係について分析する（第6章の実証研究）。

（5）第二言語不安と自尊感情との関係について分析する（第7章の実証研究）。

（6）第二言語不安と対人不安との関係について分析する（第8章の実証研究）。

（7）第二言語不安の軽減に対する対処策の使用実態を分析する（第9章の実証研究）。

上記の実証的検討によって得られた結果をもとに、第二言語不安の軽減策を提案して、第二言語教育現場の応用のための示唆を提示したい。

3．本研究の理論的枠組み

Tobias（1986）は学習過程を情報の入力段階（input）、処理段階（process）、出力段階（output）の3つの段階に分け、不安はそれぞれの段階において認知的資源を消費し、個人の情報処理能力を損なうと仮定した。本研究では、Tobiasのプロセスモデルを理論的枠組みとする。

4．データ分析の方法

データの収集はアンケートにより実施する。データの分析方法として、アンケート調査用紙について信頼性の分析を行った。因子分析、そして内的統合性の分析によって、負荷量により項目の取捨選択を行って因子を確定する。第二言語不安と動機づけなどの各要因との関係は主に相関係数を算出して考察を行う。調査対象の3つのグループ間の比較は主に度数と平均値をもって比較する。

5．論文の構成

第１章　序論

第２章　本研究の位置づけ

第３章　不安から第二言語不安へと

第４章　第二言語不安と習得結果との関係

第５章　第二言語不安と動機づけとの関係

第６章　第二言語不安と自己効力感との関係

第７章　第二言語不安と自尊感情との関係

第８章　第二言語不安と対人不安との関係

第９章　第二言語不安の対処策

第10章　結論

6．研究のまとめ

6.1　各章の考察とまとめ

本研究は、中国人日本語学習者、中国人英語学習者と日本人英語学習者の３つのグループを対象に、第二言語不安を焦点にし、習得結果、動機づけ、自己効力感、自尊感情、対人不安等の側面を理論面と実証面の両面で検討し、第二言語不安の本質と実態を明らかにすることを目的としたものである。そして、本研究の実証的検討から得られた結果をもとに、第二言語不安軽減の方策についていくつかの提案を行い、第二言語習得の教育現場での実践に寄与したい。

第１章では、研究の目的、研究課題、本研究の理論的枠組み、研究方法及び論文の構成ついて述べた。

第２章では、これまでの第二言語習得研究と第二言語習得における個人差研究について概観し、本研究のテーマである第二言語不安の位置づけを明らかにする。これらの概観から、第二言語習得研究は、いわゆる「学習者言語」から「学習者要因」へと研究の焦点が変わりつつあることが示された。学習者要因の中に、「情意要因」というものがある。情意要因の構成要素として主に動機づけ、言語不安、自尊感情、自己効力感の４つがあげられ、本研究の焦点である第二言語不安は、個人差において情意要因の１つであることが示され、そしてこれらの要因は実際にはお互いに影響しあい、部分的に重なり合っていると考えられる。

第３章では、第二言語不安研究の先行研究と課題を述べた。第二言語不安研究に先立つ心理学での不安研究を、その概念、分類、不安を測るスコアの開発に分けて概観し、第二言語不安研究の原点と接点を探った。次に、第二言語不安を焦点にし、その概念、モデル、第二言語習得における影響と対処策を概観した。

第二言語不安自体についての実証的調査から、FLCAS(Foreign Language Classroom Anxiety Scale) は相当信頼性の高い尺度であることを再検証した。3つのグループいずれも「発言」というキーワードに集中しており、言語不安を引き出す導火線はこの「発言」にあるのではないかといえる。これは、Young (1990) が「人前で話すことが最も不安を喚起する」という指摘と一致している。なお、本研究では「発言」の次に言語不安を引き起こすものとして「予期しないこと」と「他者との比較」の2つが考えられる。おそらく「発言」不安、「他者との比較」と「予期しないこと」に対する不安は、学習者の第二言語能力が不十分であるということに対する自己認識からくるものであろう。自分の第二言語能力に自信があれば、第二言語不安が大幅に軽減することが予想される。

以上のようなことを第二言語教育現場に応用するには、まず、学習者の言語不安を低減するために個別の「発言」を制約するような学習場面の工夫が考えられる。「予期しないこと」ということについては、教師が学習者に発問する場合には、学習者が了解した内容について質問する工夫が必要であろう。「他者との比較」では、学習者の間では必要以上に個人間の競争をあおらないような学習の雰囲気の必要性が認められる。その1つの方法としては、個人間の競争を学習者グループ間の競争に置き換えることが考えられよう。こうすることにより、学習者がリラックスでき、しかも一定の緊張性を保つ教室の雰囲気を作ることができるであろう。

第4章では、第二言語不安は認知プロセス、学習ストラテジー、学習態度と習得結果にそれぞれ影響を及ぼすことを明らかにする。本研究は、第二言語不安は妨害的だと認識し、第二言語不安と習得結果との間に負の相関関係にあると予測する。

実証調査の結果、中国人日本語学習者グループ、日本人英語学習者グループと中国人男子英語学習者グループでは、習得結果と不安得点の間にはそれぞれ $r=-0.48$、$r=-0.33$、$r=-0.39$ で負の相関関係があることが明らかになり、Horwitz et al. (1986)、Price (1991) と Aida (1994) の FLCAS と習得結果の間に負の相関があるという先行研究の研究結果と一致した。また、この傾向は本研究の当初の予測とも合っていた。

なお、本研究の実証調査では、目標言語、学習者の国籍と男女差により、第二言語不安と習得結果の関係は微妙に変わってくるが、いずれの場合も第二言語不安と習得結果の間に負の相関関係にあるという方向性が認められ、また第二言語不安は習得結果に妨害的な作用があると言えよう。これは本研究の予測とよく合致している。よって、第二言語習得では、第二言語不安の軽減が効果的だと考えられる。

各セクションの成績と不安得点との相関関係からは、聴解のほうが最も不安と関連しているという結果が得られた。

また、第二言語不安の改善と習得結果の向上の両視点から、聴解と読解・文法での不安を軽減することが必要であり、これも習得結果の向上につながると予測される。

第5章では、本研究は、「過程説」という論点を持って、動機づけを「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」に分けて論考する。「過程説」とは、外発的動機づけから内発的動機づけへと転化するには、外発の段階、注入の段階、同一化の段階、内発の段階へと進むという4つの段階を経るというものである。

調査の結果、学習者の動機づけについて「習得欲求」と「興味」の2因子を得た。先行研究に基づいて、「習得欲求」は外発的動機づけであり、「興味」は内発的動機づけであると位置づけた。

本研究では不安得点と外発的動機づけとの間には相関がないことがわかった。第二言語不安と外発的動機づけとの間の無相関から、第二言語不安が外発的動機づけの予期だけでは説明することができないということを意味すると考えられる。

また、不安得点と内発的動機づけとの間には負の相関があることもわかった。よって、第二言語不安は内発的動機づけにより解釈するという結論をもたらした。つまり、目標言語そのものに動機づけられる場合に、目標言語の運用においてより安心している状態にあるといえよう。

なお、外発的動機づけと内発的動機づけは有意な正の相関にあることが、本研究では証明された。内発的動機づけと外発的動機づけは互いに相容れないネガティブな関係ではなく、むしろ生産的なポジティブな関係にあるとされていている先行研究の結果ともよく一致している。

以上のことから、内発的動機づけを高める指導が重要視されるべきであろう。指導法として、ポートフォリオ、学習課題の多様化と協働的学習の3つがある。本研究はとくに「協働的学習」を重要視する。第3章では、第二言語不安自体についての実証調査からわかったように、第二言語不安を引き出すキーワードとして「他者との比較」があげられる。教育現場では、学習者の間では出来る限り競争の雰囲気を育てないようにする。ここでいうと「協働的学習」のことである。

第6章では、第二言語不安と自己効力感との関係について論じた。自己効力感とは、自己に対する信頼感と有能感であり、自信の下位概念である。

本研究の実証データからもわかるように、不安得点と自己効力感の相関関係では、3つのグループともに有意な負の相関が認められる。つまり第二言語不安を軽減するには、自己効力感を高揚しなければいけない。なお、自己効力感に最もつながっているのは、努力因子と努力因子を解して作用する挑戦因子と挫折因子であるといえよう。

効力感を育成するには、努力帰属のしやすい評価方式、努力のしがいがある課題の提示、自分の意志による選択、非評価的雰囲気での自己選択、仲間同士の教えあい、集団間の競争が考えられる。

第7章では、第二言語不安と自尊感情との関係について論じてきた。自尊感情とは、自分自身をどうとらえ評価しているかということである。本研究では、自尊感情が高いということは、自分は「これでよい（good enough）」ということを意味するものとする。

実証調査の結果、中国人英語学習者と日本人英語学習者のグループでは、自尊感情と不安得点の

間には有意な負の相関にあることがわかった。第二言語不安を低減するために、自尊感情を高揚しなければならないということが示された。自尊感情を高め不安を軽減させるためには、クラス内における他者との比較を緩和し、クラスメートに対する認知を改善することが1つの方策であると考えられる。学習者同士は、競争の相手ではなく、学びあう・励ましあう・信頼しあえる仲間であるという認識を持たせ、学習者は学習に対するいままでの考え方を変えるべきではないかと思う。また、第6章で述べたように、教える側には学習者を相対評価ではなく、学習者一人ひとりの到達度評価のような個人内評価が望まれる。

一方、中国人日本語学習者のグループでは、自尊感情と日本語の言語不安得点の間には有意な相関が見られなかったことから、日本語の言語不安と自尊感情はお互いに影響し合う関係がないことがわかった。よって、目標言語によって自尊感情と言語不安の関係が変わってくるといえよう。

グループ別に自尊感情の高さを比較したところ、中国人グループは日本人グループより平均して自尊感情が高いことがわかった。真の自尊感情つまり「自己受容」傾向の自尊感情において、日本人グループは中国人グループと比べて低いといえよう。加えて、3つのグループの中で日本人英語学習者の自尊感情と不安得点との相関が最も強い。よって、3つのグループで日本人英語学習者が最も自尊感情を高揚させる必要性があるといえよう。

第8章では、第二言語不安と対人不安との関係について論じた。対人不安（social anxiety）とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義している。対人不安を「状態不安（state anxiety）」であると位置づける。

本研究では、第二言語不安と対人不安（相互作用不安と聴衆不安）との間に、それぞれ正の相関関係が検証された。第二言語不安と対人不安との間に正の相関が見られたことから、第二言語不安の高い学習者は一般的な対人不安も高い、或いは一般的な対人不安の高い学習者は第二言語不安も高い傾向があるといえる。先行研究とも統合した結果となっている。第二言語での言語不安と母語使用も含めた一般的な対人不安は同質のものであることがうかがえた。それはおそらく他者との関連に発生するのではないかと思われる。

第二言語不安、相互作用不安と聴衆不安との相関関係から、中国人学習者は他者と直接的に関係していないと言われる聴衆不安で、より第二言語不安を感じていると言える。一方、日本人学習者は他者と関係しているかどうかに関わらず第二言語不安を感じていることがわかった。このことから、中国人学習者の場合では第二言語不安を軽減するには、人と直接に関わらない聴衆不安の軽減から着手する必要性がある。一方、日本人学習者の場合では第二言語不安を軽減するには、相互作用不安と聴衆不安の両面から着手する必要性がある。

第9章では、第二言語不安と第二言語不安の対処策との関係について論じた。不安の対処積極度

と不安得点の相関関係から、中国人日本語学習者と日本人英語学習者では、対処策積極度と不安得点の間に有意な負の相関が見られたが、中国人英語学習者では、対処策積極度と不安得点の間には有意な相関が見られなかった。調査対象者の違いによって、結果は多少違ってくることも考えられるが、本研究からは、第二言語不安は直接言語学習に悪い影響を及ぼしているだけではなく、間接的に不安の対処積極度にも悪い影響を及ぼしていることがわかった。よって、第二言語不安の高い学習者は言語学習だけではなく不安の対処積極度も低くなるので、なおさら悪い。とりわけ中国人日本語学習者と日本人英語学習者グループにおいて、第二言語不安に高い傾向が見られる学習者に対する支援が必要となる。

グループ別によく使う対処策、グループ別にあまり使わない対処策とグループ別の不安の対処積極度からわかったように、中国人英語学習者を対象とする第二言語教育ではとくに指導する必要がないと思われる。言語不安の解決に支援を必要とする中国人日本語学習者と日本人英語学習者の中でも、日本人英語学習者グループはトップであることがわかった。

以上の結果を第二言語教育に応用すれば、中国人を対象とする日本語教育と日本人を対象とする英語教育では、その言語不安を軽減するために、まず不安の対処策を意識的でしかも積極的に授業に取り組む姿勢が要求される、また学習者自身はもともと自分の言語不安に自己意識を持っていて、その対処策を積極的に取ろうとしている姿勢をフォローする教師の態度が必要であると考えられる。

第10章では、本研究の結論について述べた。各章の実証データのまとめ、総合考察、第二言語教育への示唆、本研究の意義と課題を述べた。

次の表1、表2、表3で示されたように、3つのグループの平均値で第二言語不安に影響の強さから弱さの順でいうと、対人不安の聴衆不安、自己効力感、対人不安の相互作用不安、対処積極度、習得結果、興味（＝内発的動機づけ）、自尊感情の順になる。中でも、第二言語不安は対人不安（相互作用不安と聴衆不安）と、第二言語不安は自己効力感とは比較的強い相関があることと、第二言語不安と習得欲求（＝外発的動機づけ）と相関がないことが特徴づけられているように見える。

6.2　第二言語教育への示唆

第1章から第9章までの理論的、実証的検証により、第二言語不安を克服するには、学習者自身に委ねる以外に、教師が学習者を助けて不安を低減する働きも重要な存在であると思われる。先行研究 Young（1991）により、言語不安を引き起こす要因として6つをまとめたが、その中、競争は第二言語不安を引き起こす一番な要因とする。また、クラスの言語活動の形式として、クラスメートの前で発言しなければならない場合言語不安を引き起こすという。Oxford（1999）は不安に対する対処行動のヒントを13項目あげている。この13項目の中でも、自信をつけることが不安を軽減

させる大きな原動力になると考えられる。

第二言語不安の軽減の議論の中で、「競争」、「発言」と「自信」は第3章から第8章まで、たびたび触れるキーワードである。第3章からは、学習者の言語不安を低減するために、個別の「発言」に制約を与えるような学習場面の工夫の必要性が認められる。「他者との比較」に対する不安では、学習者の間では必要以上に個人間の競争をあおらないような学習の雰囲気の必要性が認められる。第5章では、不安得点と内発的動機づけとの間には負の相関があることがわかった。内発的動機づけを高める指導法として「協働的学習」を提案した。この協働的学習は、学習者の間では出来る限り競争の雰囲気を育てない一方、学習グループの間では競争を育てるようにする教育法である。第6章では、第二言語不安得点と自己効力感とは有意な負の相関があることがわかった。第二言語不安を軽減するには、自己効力感を高揚しなければいけない。自己効力感を形成させるために、従来の「5段階相対評価」と比べ、自分の進歩のあとが自分でわかるような評価である「個人内評価」のほうが、その可能性を拓く方法と言える。第7章では、自尊感情と不安得点との間には有意な負の相関にあることがわかった。自尊感情を高め不安を軽減させるためには、クラス内における他者との比較を緩和し、クラスメートに対する認知を改善することが1つの方策であると考えられる。学習者同士は、競争の相手ではなく、学びあう・励ましあう・信頼しあえる仲間であるという認識を持つように、いままでの考え方を変えるべきではないかと思う。第8章では、第二言語不安と対人不安（相互作用不安と聴衆不安）との間に、それぞれ正の相関関係が検証された。第二言語での言語不安と母語使用も含めた一般的な対人不安は同質のものであることがうかがえた。それはおそらく他者との関連に発生するのではないかと思う。

以上のことから、第二言語不安を軽減するためには、できるだけ不必要な学習者の間の競争を避けるべきことが示唆された。不必要な学習者の間の競争を避けるために、クラスでの個別の「発言」を学習者に控えさせるような場面を工夫したり、「協働的学習」を通して不必要な学習者の間の競争の雰囲気を避け、学習グループの間の競争を育てること、従来の「5段階相対評価」のかわりに「個人内評価」を導入し、学習者の自信を育てること、クラスメートに対する認知の改善などの教育支援法が必要であると考えられる。

表1　中国人日本語学習者：第二言語不安と諸要因との相関関係明細表

項　　目	習得結果	自己効力感	自尊感情	対処積極度	習得欲求	興味	相互作用不安	聴衆不安
言語不安と諸要因との相関係数	−0.48	−0.61	−0.07	−0.23	0.03	−0.25	0.39	0.65
平　均　値	−0.31	−0.61	−0.23	−0.33	−0.01	−0.28	0.42	0.67

表２　中国人英語学習者：第二言語不安と諸要因との相関関係明細表

項　　目	習得結果	自己効力感	自尊感情	対処積極度	習得欲求	興味	相互作用不安	聴衆不安
言語不安と諸要因との相関係数	−0.13	−0.57	−0.20	−0.17	−0.07	−0.18	0.18	0.71
平　均　値	−0.31	−0.61	−0.23	−0.33	−0.01	−0.28	0.42	0.67

表３　日本人英語学習者：第二言語不安と諸要因との相関関係明細表

項　　目	習得結果	自己効力感	自尊感情	対処積極度	習得欲求	興味	相互作用不安	聴衆不安
言語不安と諸要因との相関係数	−0.34	−0.63	−0.43	−0.58	0.01	−0.40	0.70	0.66
平　均　値	−0.31	−0.61	−0.23	−0.33	−0.01	−0.28	0.42	0.67

７．参考文献

Aida, Y. (1994). Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78, 155-168.

Horwitz, E. K., Horwitz, M. B. & Cope, J.(1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132.

Oxford, R. L.(1999). Anxiety and the language learner: New insights. In Arnold, J.(ed.). *Affect in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Price, M. L.(1991). The subjective experience of foreign language anxiety: Interviews with highly anxious students. In E.K. Horwitz & D. J. Young(Eds.), *Language anxiety: Form theory and research to classroom implications*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 101-108.

Tobias, S. (1986). Anxiety and cognitive processing of instruction. In R. Schwarzer (Ed.), *Self-related cognition in anxiety and motivation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 35-54.

Young, D. J. (1990). An investigation students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 539-553.

Young, D. J.(1991). Creating a low-anxiety classroom environment: What does the language anxiety research suggest? *Modern Language Journal*, 75, 426-439.

論文審査結果の要旨

王玲静の本研究は、中国人日本語学習者、中国人英語学習者及び日本人英語学習者の3グループを対象に、第二言語不安（Second Language Anxiety）に焦点をあて、習得結果（Results）、外発的動機づけ（Extrinsic motivation）、内発的動機づけ（Intrinsic motivation）、自己効力感（Self-efficacy）、自尊感情（Self-esteem）、対人不安（Social Anxiety）等の概念的要因を考慮に入れ、理論及び実証の両面より第二言語習得における不安の本質と実態を明らかにすることを目的としたものである。データの収集には350名程の被験者を対象に中国及び日本でアンケートを実施し、そこから第二言語不安と動機づけ等の各要因との相関関係を係数として算出し、さらに調査対象3グループ間の比較を度数及び平均値をもって表したものである。調査結果からわかったこととそれに対する考察は以下の通りである。

まず、3グループの相関係数から算出した平均値において、第二言語不安に影響を与える要因の重要度は、対人不安、自己効力感、習得結果、内発および外的動機づけ、自尊感情の順になる。中でも、第二言語不安は、対人不安と自己効力感とに強い相関がある。すなわち、第二言語不安は対人不安と同質のものであり、自信の不足に最も関係している。

次に、3グループ間には第二言語不安の傾向でかなりの共通点が見られるが、相違点も見られる。中国人英語学習者グループは3グループ内では、第二言語不安と諸要因との相関が最も弱い傾向が見られ、日本人英語学習者グループはそれらの相関が最も強い傾向が見られる。中国人日本語学習者グループはその中間に位置する。

最後に、教育実践の視点より第二言語不安と先で述べた各要因との相関関係結果を吟味しその意義を議論する中で、第二言語不安を軽減のためには、可能な限り不必要な学習者の間の競争を避けるべきあると示唆する。

本研究は実証的検討から得られた結果をもとに、第二言語不安軽減の方策について提案を行い、第二言語習得の教育現場での実践を示唆しようとしたものである。これまでのこの分野での研究の多くは、欧米語の学習者・母語話者を対象としたものであり、中国語・日本語の学習者・母語話者をあつかった点で、本論文はユニークなものである。

論文審査においても王玲静は10章からなる自らの論文の内容を非常に要領よくまとめ解説し、審査委員の質問にも明確に応答した。

本学大学院国際文化研究科教授会の選定した上記審査委員5名が博士審査を行った結果、王玲静は自立した研究活動を行うに必要な高度な研究能力と学識を有する者であるとの結論にいたった。

よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。